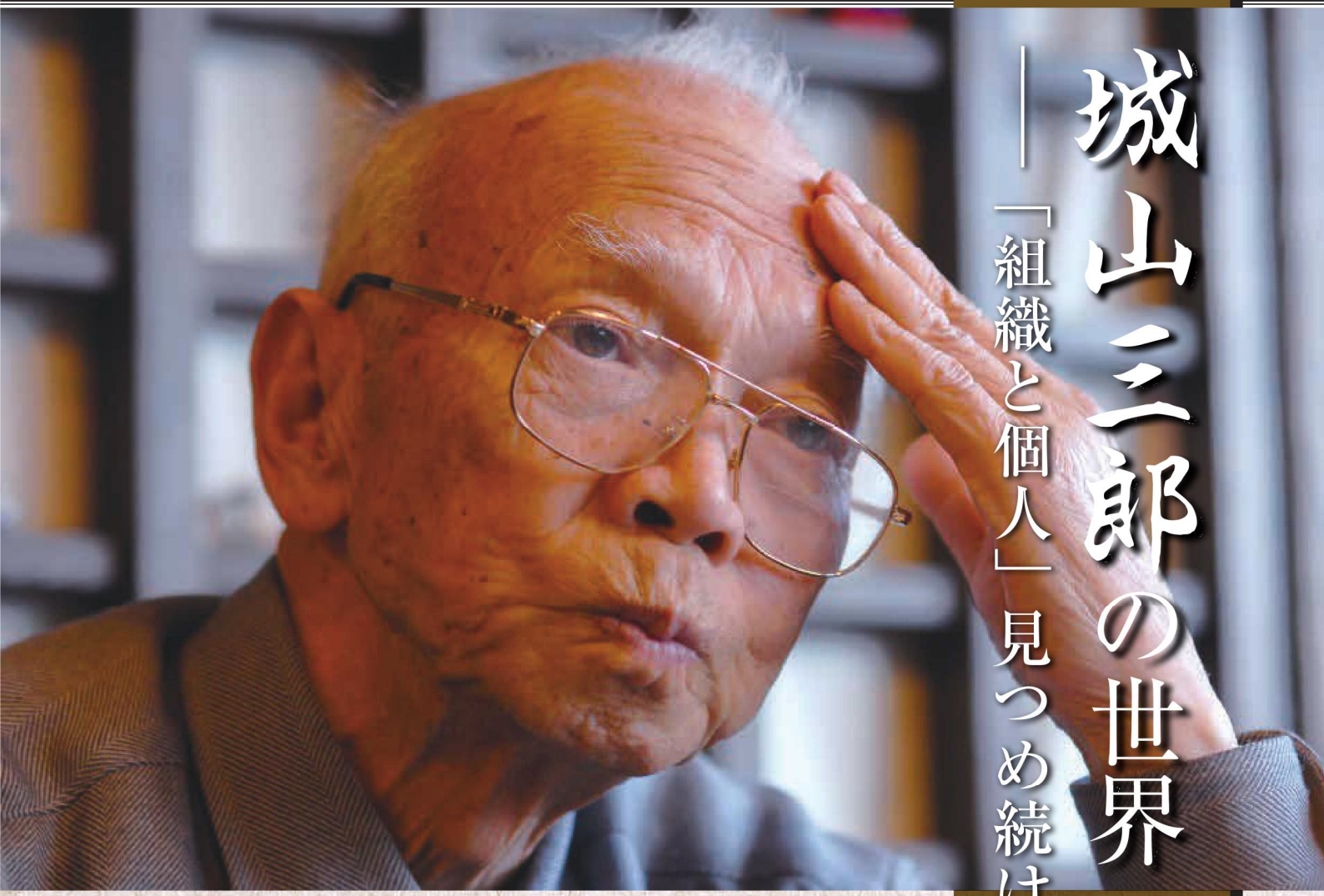
作家

城山三郎の世界

――「組織と個人」見つめ続けて――



人間の営みを見つめ、日本の行く末を案じ、「組織と個人」の在り方を追求した作家城山三郎（1927～2007）。政治や経済の時流に揺さぶられながらもひたむきに生きる人間の姿を、陰影のある文体で浮き彫りにした。名古屋市に生まれ、神奈川県茅ケ崎市で暮らしたが、終生、兵庫・神戸を「心の故郷」として愛した。「人が育ちやすい、人の力を大事にする風土があった」。膨大な作品群の中に、兵庫を舞台にした作品がいくつもある。鈴木商店の焼き打ち事件の真相に迫った『鼠』（1966年）、ダイエー創業者中内功の生きざまを描いた『価格破壊』（69年）、旧川西航空機（現新明和工業）の技術者のドラマ『零からの栄光』（70年）、俳人永田耕衣を書いた『部長の大晩年』（98年）…。作品の舞台を歩きながら、没後も私たちの心をとらえ続ける城山文学の秘密を探った。

（神戸新聞東京支社編集部長兼論説委員　加藤正文）

鈴木商店大番頭の金子直吉

燃え上がる鈴木商店。その後の破たんは昭和恐慌の引き金となった＝1918年8月12日、神戸市

「資本主義の原点」

城山三郎は関西に所用があるときはいつも神戸に泊まるようにしていた。港を見下ろす高層ホテルを定宿にし、大小の船の出入りや、造船所の風景、夜には水面に淡く映るネオンサインを見つめた。

「ある程度の本を置いている大型書店が無いと困るが、神戸の街には、それがある。加えて、気分転換に、ふらりと入れる喫茶店も欲しい。時には、毎日の散歩以上に足をのばして、丘や山の上にも行ってみたくなる。それらのすべてを叶えてくれるのが、神戸の良さであろう」（「神戸讃歌」『嬉しうて、そして…』所収）

国内外を旅した城山だが、神戸にはひときわ思い入れが深かった。妻の容子（故人）ともしばしば訪れ、妻亡き後は孫とともに訪れた。

筆者は、亡くなる1カ月ほど前の２００７年２月に茅ヶ崎を訪ね、城山に話を聞いた。小柄で痩身。決して声を張り上げない。淡々と、人生と作品を語った。体はだいぶ弱っていたが、兵庫・神戸の話になると、目に光が宿った。鈴木商店の大番頭金子直吉、ダイエー創業者中内功、旧川西航空機の（現新明和工業）を率いた川西龍三、俳人永田耕衣（こうい）…。神戸や阪神間、播磨を舞台に活躍した人々について愛惜を込めて話した。

近代都市・神戸の特性を城山は的確に見抜いていた。その6年前こんなインタビュー記事がある。

「神戸には何度も通いました。大正末期に新興財閥にのし上がった鈴木商店の数奇な運命を描いた作品『鼠』の取材です。部屋を借りようかと思ったほどでしたよ。先進性のある最先端を行く街、こんな印象があります。最も原始的な形で近代感覚や日本資本主義が生まれたところですね。新しく移り住んだ人たちのバイタリティーが、街の性格形成に役立ったのでしょう。金子さんや中内さんのような人を生んだのもそういうところが影響している。京都や名古屋と違ってしがらみがなかった。自らの力の通りにやれる土壌があった。人が育ちやすい、人の力を大事にする気質があったのですね」（傍線筆者）

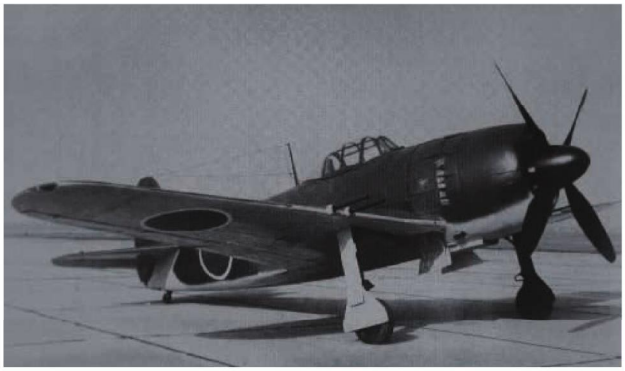
鼠　鈴木商店焼打ち事件

名作の舞台を歩こう。まずは城山が30歳代に書いた「鼠　鈴木商店焼打ち事件」。鈴木は悪徳商社である、という当時の世間の認識に対し、綿密な取材で反ばくした。経済小説の地位を高めた城山文学の金字塔とされる。

三井、三菱をしのぐ巨大商社、鈴木商店。大正末期、すい星のように現れ、世界を席けんし、昭和恐慌の引き金を引き、日本を恐慌の渦へと巻き込んだ。実体を失ってもなお、伝説は語り継がれる。

繁栄も破たんも、同じ男の中にあった。土佐出身の金子直吉である。大番頭として新興の砂糖商を巨大商社に育て上げた。傘下には現在の神戸製鋼所、帝人、双日、ＩＨＩなど約50社。「工商立国」を唱え、国家のやるべきことをやっているという強い自負があった。

「信用と財産とを充分に利用して出来るだけの金をこしらえ、極度の融通を計ってもらいたい。まっしぐらに前進じゃ。鈴木の大を成す



川西航空機の製作した紫電改

新明和工業が製作した水陸両用の救難飛行艇

は、この一挙にある」

第一次世界大戦が起きた１９１４年、未曾有の混乱の渦中にあるとき、金子は会計主任にこう命じた。船舶をふくむすべての商品に対して一斉に買いに出た。（ゴチック部分は本文引用。以下同）

１９１８年８月12日夜、本店は焼け落ちた。「米不足というのに白米を買い占めている」。世間を支配したのは鈴木を「利己主義の権化」とする理解だった。疑問を抱いた城山は真実を追い求め、取材を重ね、通念に挑んでいく。

「鈴木は悪いことなんぞしていない。いつか、きっとわかるんじゃ」。それが直吉の返事であった。彼は単純にそう信じているフシがあった。彼の前には、事業そのものしかなかったのである。

零からの栄光

空への技術開発に燃えた男たちのドラマを描いた名作が「零からの栄光」である。川西航空機。西宮に本社を置き、航空史に残る名機を生んだ。大型飛行艇「二式大艇」（１９４０年）、戦闘機「紫電改」（43年）…。社長は川西龍三。日本毛織、川西倉庫などを擁した旧川西財閥の二男だが、当時、「底無し道楽」と揶揄された飛行機を担当した。

開発には金を惜しまなかった。菊原静男ら優秀な技術者が集まった。三菱、川崎など大手がしのぎを削る中、「鳴尾村の田舎会社」には熱気が渦巻いた。37年入社のＯＢは「外国製を適当に改造するのでなく、すべてを作り上げる姿勢。燃えましたね」と述懐した。

飛行機が好きだった城山は、川西龍三に焦点を当てる。「川崎、中島でなく、なぜ兵庫の川西で？　がきっかけでした」と話した。

一九四二年正月。若い技師たちが集まって酒をくんだ。「うちも水上機ばかりやって居らんと、ひとつ陸上機もやったらどうや」。新しい領域で可能性を試してみたい。「それじゃ、どんな戦闘機をつくる」。酒に酔った若い瞳が、ぎらぎら輝き出す。酒もご馳走も飛行機の魅力には勝てない。一同は工場へ繰り出し、設計部にとじこもった。

敗戦。すべてが零（ゼロ）になった。西宮、神戸、姫路など主力工場が焼け落ち、航空機製造は禁止。生き残るための苦闘が始まった。印刷業、病院経営、三輪自動車製造…。「航空機会社を名乗れない」と47年に「明和興業」に社名変更。しかし、空への思いは募るばかりだった。

龍三の夢の支えとなったのは紫電改や二式大艇を作った誇りと自信である。苦労しながら温存してきた社内の技術。もう一度花を咲かせてみたい。あの「飛行機屋」たちのことなら、十年の空白も必ず追いつき、追い抜いてくれるであろう。もう一度、あの男たちに賭けてみたかった。

空をあこがれ続けた川西のＤＮＡは今も新明和工業に生き続けている。神戸市東灘区の新明和工業甲南工場。ごう音とともにエンジンがうなり、プロペラが回り始めた。全長30メートル

経済小説の枠にとどまらず、「組織と人間」の在り方を見つめ続けた城山三郎＝2007年2月、神奈川県茅ケ崎市（撮影・後藤剛）

作家 城山三郎の世界

――「組織と個人」見つめ続けて――

「父の創作の原点は戦争体験」と話す二女の井上紀子さん＝神奈川県茅ケ崎市

ほどの機体が動きだし、ゆっくり海面に降りていく。救難飛行艇の試運転だ。荒海にも着水でき、航続距離は長い。「技術の粋を集めた傑作機」と現場の担当者は胸を張った。

「戦争を繰り返さない」

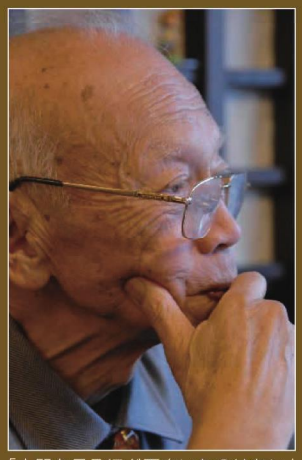
人生かけて追求したテーマが「組織と個人」だった。少年時代、海軍に身を投じたが、そこで幹部の腐敗を目の当たりにする。そして移動先で見た広島の原爆。「文学を志すきっかけになった」。組織に虐げられない個人の生き方とは―。自由で自立した人物を好んだ。渋沢栄一、石坂泰三、本田宗一郎、中山素平…。「現場に行くと、何かひらめくものがある」といって、国内外を歩き続けた。

茅ケ崎市に住む二女の井上紀子に会った。「父の創作の大きな目的は戦争を書き残すということ。二度と繰り返したくないと、戦争につながりかねない状況に対する危機感がたえずありました」

晩年は、個人情報保護法案に異議を唱えた。「言論弾圧以外、何物でもない。うっかりすると、ああいうことを政府にやられてしまう」。静かでありながら、平和を脅かすものに対する怒りがにじんだ。

2007年3月、茅ケ崎市の病院で死去。城山は都心から離れたこの街で執筆に没頭し、本を読み、家族と穏やかな日々を過ごした。愛妻容子さんへの思いをつづった回想録「そうか、もう君はいないのか」でも茅ケ崎の様子が描かれる。

今年6月の暑い日、城山が日々、散策したという道を歩いた。駅前からしばらくすると湘南海岸に出た。烏帽子岩が見える。「静かに行くものは健やかに行く。健やかに行くものは遠くまで行く」。作家が信条としていた言葉が浮かんだ。（文中敬称略）



「人間を見るほど面白いものはない」と話した城山三郎＝2007年2月、神奈川県茅ケ崎市（撮影・後藤剛）

しろやま・さぶろう

「落日燃ゆ」「毎日が日曜日」など伝記小説や経済小説の第一人者。本名杉浦英一（すぎうら・えいいち）。東京商科大（現一橋大）卒業後、大学講師の傍ら小説を書き、1957年「輸出」でデビュー。59年、総会屋を主人公に企業の悪を暴いた「総会屋錦城」で直木賞を受賞。「小説日本銀行」などで、経済小説ブームの先駆けとなった。

A級戦犯として処刑された広田弘毅元首相を題材にした「落日燃ゆ」で75年、吉川英治文学賞。戦前の金解禁を断行し凶弾に倒れた浜口雄幸首相と井上準之助蔵相を描いた「男子の本懐」などの伝記小説、「官僚たちの夏」などの政治小説で組織と個人の葛藤を描き続け、96年に菊池寛賞を受賞した。2003年に成立した個人情報保護法に反対、積極的に発言していた。

城山が親しんだ海岸の風景。「湘南　海光る窓」というエッセーもある＝神奈川県茅ケ崎市